

## ドイツ「二十年代」にみるゲーテ (Ⅱ)

## ——形態学への関心——

土 橋 寶

キュンメル (Friedrich Kümmler, 1933～) は、ゲーテの自然科学的研究をその本質的立場に立って学問的に受容し、彼の関心の真意を掴むことの困難さを語っている<sup>1)</sup>。彼によると、ゲーテの観察方法を採用することは、まだとてもできない。ゲーテと同じように、自然を流動的な現象のまま知覚し、自然の生きた内的な姿を追求するには、従来の自然科学的研究の枠内ではみられぬ精神状態を要するからである。哲学者にはゲーテの精神を会得するのは容易であったのかというと、事はそう単純ではない。ゲーテは、カントとドイツ観念論の哲学とは異なる本質的側面を有している。「ゲーテが当時のすべての哲学に対して斜にかまえ、哲学的概念性の強い影響力から彼固有の特性を遠ざけようとして細心の注意を払っていたという点」<sup>2)</sup> は、真剣に考慮するべきである。ゲーテを客観的観念論として正しく特徴づけることは可能かも知れない。しかしそれは、概念としては自己矛盾であろう。むしろ我々は、観念論をこえた現代哲学にゲーテの正しい理解への道を求めることが妥当であろう。かくてキュンメルは、ディルタイ学派でもとりわけゲッティンゲンで研究と教育にたずさわった、フッサールの現象学の影響を受けていた「ゲッティンゲン学派」の哲学者の研究に注目する。またボルノーは、わが国のゲーテ研究者の一部によって創られた「ゲーテ自然科学の集い」刊行になる『モルフォロギア』第四号 (1982) にキュンメルとともに寄稿し、「ハンス・リップスのゲーテ自然科学考」というテーマで論じている。

ここでは、以上の成果に依拠しながら、リップス (Hans Lipps, 1889～1941) のゲーテ研究の一端を特に1920年代の論文を中心に概観してみることにしたい。

ゲーテの自然科学についてのリップスの研究は、まずゲーテの植物学・動物学の論文で触発されたものとみえる。『器官の従属関係』(Die Subordination der Organe. 1921) という論文には、かなり長い論述がみられる。ついで『認識現象学研究』(Untersuchungen zur Phänomenologie der Erkenntnis. 1927, 1928) の短かい数節、最後に『自然科学の形態学のために』(Zur Morphologie der Naturwissenschaft. 1932) と『ゲーテの色彩論』(Goethes Farbenlehre. 1939, 1940) という論文が、ゲーテについて書かれたものの大半である<sup>3)</sup>。

## I. 厳密な学としての形態学

リップスは、ゲーテの形態学についてどのような理解を示しているのか。『器官の従属関係』という初期の論文は、キュヴィエによって鑄造され、さらにゲーテに受容され、ユクスキュルの生態学的研究で新たに繰り返される「器官の従属関係」を主題としている。器官の従属関係とは、近頃では、さなだ虫のような寄生動物がその形成された最終段階で全くの生殖管になっていて、生殖や発生の負担のために、肉体的なものがその補助器官でしかなく、神経組織や運動器官が重要でないものになってしまっているというような適応の事実を意味しているが、リップスによる

と、それはキュヴィエやゲーテでは大変異なったものであった。彼らでは、器官の従属関係とは、適応の標識ではなく、組織化、器官形成の標識を意味していた。この器官形成の標識で問題となるのは、「あるものが何のために役立っているか、又は何かに役立つ状態になく、又それが欠けているか」を問うということではない。「ある器官は何から発生するか」と問うことである<sup>4)</sup>。ここには器官形成の一定の性格が予想されている。器官形成の性格は、その背後に型をもつ。従属関係は、真正の多様性の表現でしかない。この形態化の多様性は、単なる多種多様さとは別の何ものかである<sup>5)</sup>。

ゲーテの意味での従属関係では、差異のある器官形成の類似性が出発点となる。型とは多様性へと分れるもの、自らで変るものである。その都度の形成作用は、一定の器官の従属関係で特徴づけられ得る。

リップスは、器官はその都度その生物の全体的性格、一つの「建築設計」(Bauplan)に規定されているという理論をキュヴィエ、ゲーテ、キールマイヤーにみいだそうとしている。ゲーテが動物学で示した予算一定の法則、つまり代償の法則に、リップスはこの建築計画をみとめていると思われる。

リップスは、カールスの作品を取り上げて論じたあと、有機体の概念を概観している。この概念は、既にホップスにおいて出現しているが、そこでは合目的的に機能し、しかも完全である錯綜したメカニズムを表わすものであった。最も完全な機械としての有機体の考えである。キールマイヤーなどでは、そのメカニズムに対する反対の意味をもつ概念となっているが、有機体とは何かということは説明されていない。その規定を知るには、アリストテレスに依らねばならない。有機体では、全体が部分に先んじている。有機体は、もともと一つの全体である。それは単に機械のように組み立てられるだけではない。部分は全体から離されない。勿論この全体が有機体としてひとりでに崩壊する場合をのぞいてのことである。器官の従属関係は、その全体への関連に即して方向づけられる<sup>6)</sup>。

リップスは、機械論に対して反対の方向にある有機体のその規定に、目的論的見解への旋回をみてとる。目的論的見解は、エンテレケイアの採用の形をとり、機械論的になることなくふるまうことができると信じている。しかし一つの機械は、その目的によって規定されている。目的の差異が機械的な構成の差異をつくる。一つの機械は、事実上目的論的にしか捉えられない。機械の統一は、目的に規定されている。機械は、この目的をねらっている。しかし植物や動物の場合、事情はどうなのか。そこには、目的という認識可能な差異のない、形態形成の多様性がある。

リップスは、有機体を合目的性の体制と呼んできたことを検討する。合目的性であるのは、有機体が生存維持に適する場合に限られる。そのような場合にはいつでも、部分の互惠性が機械の合目的性の類推で把握されるべきことは、正当である。だが、機械論者も生氣論者も、有機体を性能、能率に規定されているものとするとき、等しく誤りを犯している。合目的性を語り得るのは、特に事物の本性に賦与された可能性としての崩壊とか壊変が現にある場合だけである。合目的性は完全性とは一致し得ていない。生存の可能性は限られている<sup>7)</sup>。器官は生存維持の機能に還元されない。リップスは、機械論者による有機体の「単なる」機械としての受けとり方を技術的意味で誤解した生氣論者に注目し、有機体の合目的性は一般的原理としては否定されるべきドグマであると、考える。彼は、有機体の諸部分の予期された潜勢力の限定によって初めてその分析的、目的論的判断が一般に可能となることを指摘している。

かくてリップスは、機械論や目的論を有機体の概念において検討し、その両者による説明と判断をしりぞける。器官形成には一つの建築設計があり、有機体を諸形象の多様性へ分裂させる。

この原型の働きによって、一つの器官は他の器官の犠牲を払って大きくなるし、他の器官から差し引かれるものが付け加えられ得るのである。

リップスは、ゲーテの変態概念について特に注目している。植物の花弁や雄蕊などは葉の変形であるという植物のメタモルフォーゼの発見は、ゲーテより先にヴォルフに知られていた。しかしヴォルフは、この変化の原因を追求し、これを生長力、増殖力の漸次の減少にみた。つまり養育の衰弱が葉を花弁などの器官の不完全な育成へみちびくというのである。ゲーテはこの説明に反対であった。葉から花へさまざまな形態を形づくるのが、衰弱、萎縮に基づくはずだというのは、背理である。花弁や花冠などの器官を抑制の結果形成されたものと捉えることは、誤っている。ゲーテは、形態自体このような仕方で発生してくるとする説明に対抗した。彼は、リップスによると、因果関係の研究がことに変態において、本来の形態そのものに、つまり変態に一般に関連しえないという限界を認識していた。

因果連関による説明の限界を指摘したあと、リップスは、さまざまな外的諸部分の秘密めいた親近性を認めたゲーテの変態の直観をシェリングほか当時のロマン派の自然哲学的思弁から厳しく区分する<sup>8)</sup>。花糸は収縮した花弁であり、花弁は拡張の状態にある雄蕊であるという見方、茎葉は、粗い諸力を費して形成された萼片であるといえる如く、萼片とは洗練度の高いところで近づきつつある収縮した茎葉であるという見方では、己れを変えてゆく葉は決して抽象的な観念へと揮発しない。「ゲーテが発見したその変態は、何か非常に具体的なものである。それは、ひとつの自然科学的発見であるが、決して自然哲学的思弁ではない。」<sup>9)</sup>

ゲーテは、別の仕方で取り寄せた観念を事物に近づけたのではない。彼は、逆に自然研究者のように、事物そのものに教えられたのである。リップスは、変態の概念をゲーテにとっては「自然におけるあくまでもリアルな変化の発見」<sup>10)</sup>の成果であると、解釈する。彼は、ゲーテの労作と思弁哲学の研究との間の相違を知るには、ゲーテの色彩論を、これがヘーゲルのエンチクロペディの中でその体系中に占める立場において与えられている注解と比較してみるだけでよいと語る<sup>11)</sup>。

かくてリップスは、ゲーテの企画した変態の概念を考察するさい提出される問い、つまり葉の変化という場合ゲーテが「現実でリアルな変化」(eine wirkliche reale Umwandlung)を考えていたか、あるいはただ観念の中で遂行されている変態を考えていたかという問題、そしてほとんどいつも後者の意味で解答が与えられるという事態に、独自に関わろうとする。

彼によると、花糸や葯の代りに花弁が発達してくる場合のように後退的変態でも、「物理的に遂行されていくリアルな変化」が考えられている。ゲーテは、茎葉から花弁へ移行するチェーリップの変態を観察し<sup>12)</sup>、この花弁(葉ともいえる)の半分はなお緑で茎に属するものとして茎にいたままでありながら、あとの半分は花冠と一緒に着色して高く上へ向かっていることを水彩画に描いた。リップスによると、「このような出来事は、ゲーテには、器官の中で遂行されていく変化の直接的な証明である。そこでゲーテは、規則的・前進的変態でも、節を伴う葉の、萼や花弁や雄蕊への変化は生じるという結論を引き出す。ゲーテは、決して葉の観念の変化について語っているのではない」<sup>13)</sup>のである。

ゲーテは、漸進的な変化の過程を当時主流であった体液学説の影響の下で明らかにしようとした。洗練された樹液の供給が洗練された器官の形成という結果に対応する。そのさい各段階で、その都度より先に成立した器官体制は、次にくる器官の形成に重要である特別の成分を準備する。一定の器官の形と構造は結局その成分の組成とその成分の影響に依存する。かかるゲーテの代表する見解は、リップスによると、90年後ユリウス・ザックスが『植物器官の成分と形について』という論文で表明したのと本質的に同じ思想である<sup>14)</sup>。

リップスは、ゲーテの場合、科学的説明と思弁哲学的説明という二つの説明方式は並立することとは決してないと、考える。自ら変化する型の背景を伴う変態とは、ただ発見され得たものである。彼は、変態を次のように理解する。

「重要なのは、変態が単なる変形ではないことを知ることである。この過程の初めと終わりに、明らかに何か全く異なるものが存在するのであるから。勿論、ゲーテが、花卉が変化した花糸として捉えられうるように、花糸は一つの花弁として捉えられてよいと言う時、過程の初めと終わりは、ここでは互いに交換されうるかにみえる。だが、そのような過程は変態自体ではない。変態がおのずとそのような過程で現れてくるにも拘らず。そのようなものであるとすれば、我々はこれを変態の事例にも変形の事例にも発見しえないことになる。ここでとにかく見つけ得るとすれば、そのような同一性はまさに形態をこえたもの（Meta Morphose）であるという点に存在している。変態とは、転換である。私は、変態において異なるものへ分裂するのではなく、多様性へと分裂する一つの原型の変化を考える<sup>15)</sup>。」

ゲーテの形態学については、『自然科学の形態学のために』で更に論じられている。ゲーテにおける認識の形態学的解釈の試みと深く関連する学問の形態学的解釈が、自然科学の様式変遷として論じられている。

リップスはゲーテ独自の財産を色彩論にみとめる。一方、形態学は、当時の学問と関わり、知の歴史的状況への結びつきを示している。ゲーテは、形態学によって彼の世代に編入されている。彼は同時代の人々と疎遠にならずに研究をすすめている。従って、彼の形態学には一世代の史的情况が事実表現されている。リップスは、ゲーテの代表する世代の思考様式をいわば形態学的に概観しようとする。これは、科学の推移を博物学から自然科学への移行として捉える視点によって、ゲーテの形態学の発生論的考察を試みることであり、いい。

リップスは、動物をその「習性」(Habitus)によって特徴づけることの自明性が十八世紀以前には必ずしもそうではなく、動物や植物の具体的な現象にほとんど理解をもたない時代があったことをまず指摘する<sup>16)</sup>。人々は、書物から動物や民族性の模写を観察しさえすればそれで済んだ。我々が今日、我々の見解の特殊性を支配する点に注意するのが困難なほど自明になっていることに、当時は顧慮しなかった。動物が、当時のように「性格」(Charaktern)の具体化と見なされる場合、これは我々と「疎遠な、見解である。攻撃性の表現としてライオンの形態があげられ、何か注意深い存在として犬があげられる。かかる外面的現われは、デモーニッシュに捉えれば、動物が自己決断をしてつけた付録、衣服、性格の如きものであるだけである<sup>17)</sup>。」古い叙述の空想では、この動物の非有機的なものがいささか奇異に目立つ。リップスは、動物の形態をこのように、「機能」(Funktion)に向けて理解するのではなく、ある本質の表現としてしかみないやり方に存在する「非現実化」(Entwirklichung)を認識する。それは、今日の化学とは異なる「見方」(Ansicht)が錬金術に示されているのと同じである。

次にリンネが考察される。リップスによると、リンネは習慣的諸特性に上述の如き性格をなるほどみななかったが、しかしこの特性を直ちに「標識」として通用させた。彼は、動物をただ「物体」(Körper)として観察し、分類したのである<sup>18)</sup>。

「動物の形態の発見が不可欠であった。すなわち『変態』における形態化として<sup>19)</sup>。」

ゲーテの形態学では、植物と昆虫の形態が比較された。昆虫の蛹、幼虫、蝶に同じ動物を再発見するのは、ゲーテにとっては、経費節減の要求の結果から当然の成行であった。かくてリップスは、ゲーテによる植物と昆虫の変化の比較を叙述する。植物では、その諸部分は非常に互いに別々にある。これは、発芽から学ばれる。また植物では、「諸状態の継続」(das Skzessive von

Zuständen)はその「共存」(Zusammensein)と結びついている。昆虫では、脱皮のたびに一方から他方へと置き去りにするような異なる諸状態の「時間的継起」(ein zeitliches Nacheinander)である。

ゲーテは、脊椎骨にも変態をみつけた。彼は、ビュフォンが動物界に根源的で普遍的な設計プラン、デッサンをみた<sup>20)</sup>ように、変態を進めて、「すべての動物の形態がその可能性によって包含されているはずの『原型』という提案<sup>21)</sup>」をしている。

「有機体を描くように叙述するビュフオンの方法は、ひとつの形態学へと導く。この形態学は、動物の建築家的特性を研究する。形態学では、新たに発見された形態をわかりやすく叙述することが尊重された<sup>22)</sup>。」

次にリップスは、ゲーテの形態学と現代の形態学との相違を明らかにする。今日の形態学は、誰にでも歩みうるし学びうる道を示した「方法」をもち、事物に図式的な秩序を近づける。だが、古い形態学では、具体的な方向づけが追求された。ゲーテの問題関心は、形態という外的諸部分を、そうすることで全体が直観の中で支配されるように関連づけて捉えることにあった。ゲーテでは、形態学は、芸術と知と科学の歩みに見られうる試みである。リップスは、『形態学のために』の中に示された芸術衝動や模倣衝動と関連する「全体を幾分なりと観照において支配しようとする」衝動に促された形態学の規定に注目しているのである。形態というわかりやすさは、我々が一般に輪郭を把握する仕方とか、我々が予め輪郭の個別の形態化を、全体の中にある連関を考慮して理解する仕方をとる方向に存在している。リップスは、隠花植物の無形性、恣意的出現に心ひかれなかったゲーテが、「この区別困難な被造物に対して、わかりやすい形態の友としてほとんど敵意に近いものを感じた」とネース・エーゼンベックに書くことができたのも、こうした立場によるものだと、解釈している<sup>23)</sup>。

リップスは、また形態学の方法を特徴づける「直観の生動性」に注目し、観察主体が自然の示す例にならって自ら可動的で柔軟に保たねばならないという研究上の格率とか、現象が観察者から解き放たれずにむしろ観察者の個性ともつれ絡まりあっているというゲーテの箴言と省察もとりあげている。一致点をみいだすことは、つねに一つの秘密でありつづける。着想であれ、確証、把握、表象、概念、理念であれ、「奥義的性格」(eine esoterische Eigenschaft)を保っているというゲーテの表明が、注目されているのである。

更にリップスは、ゲーテとその当時の形態学を今日の形態学と論理的に区別することを試みる。それは、自然研究一般における相違の究明である。当時の自然研究では、研究対象は「事件」(Fall)の範疇ではなく、「模範」(Exempel)の範疇の下にあった。リップスによると、ゲーテの直観は、葉から花卉への事実上の変化に濃縮され、そこから一つの学説をとり出す。模範の普遍的意義は、そこから何かあるものを取り出され得ることにあった。この学説は、自然の中で本来いかにして起るのかとか、何が生じるかという事柄に関わってはいない。それは、どのように我々は事物を観察せねばならぬかという事柄に関わっている。自然の産物と協定するという表象方式を獲得することが、この形態学には重要な問題である。「『移ろいゆくものの中に永遠なるものをつかむ』というゲーテの言葉は、多様なものの中に単純なものが隠されているのだから、模範という視点の下で自然の中の出来事をつかむということの一表現にすぎない<sup>24)</sup>。」

あるものが一つの学説を含むかぎり、模範もあるのである。リップスは、現象そのものである学説、現象の中に含まれた学説というゲーテの理論的態度の表現は、すべてが「わが表象方式に」順応すべきことを求める彼の直観と関係すると、指摘する<sup>25)</sup>。

リップスの論述は、ゲーテが人工的装置を嫌悪せざるを得なかったこと、天文学に決して関心

を抱かなかったこと、一般に実験に疑念を持っていたこと等々の根拠を探るという方向に唐突に進んでいく。ゲーテの人工的観測装置への嫌悪は、事物に対して己れ自身を移しおく関係を問題とする関心の結果生じていた。その装置は、この関係をゆがめることになるからである。

## II. 自然科学の形態学

『自然科学の形態学のために』に加えて『ゲーテの色彩論』という論文も、ゲーテの形態学を独創的に解釈した作品であり、リップスの二十年代の思索の深化として注目されてよいであろう。彼は、ゲーテおよびその時代の科学の様式と型を科学史的に考察しながら、この歴史的考察に形態学的方法を生かそうと志向しているかにみえる。

学問的認識は、様式と型の変遷を辿る。この考え方は、一定の精神の型も個体と環境との相互依存、相関関係において発生するという形態学的見解とつながりをもっている。リップスは、認識の様式と型の発生学的考察法をゲーテの動物学や色彩論から学びとっているのである。

### 〔1〕個体と環境の相関関係

ゲーテは、生物と環境との相関関係を、魚は水によって水へと形成されると、表現している。「魚とよばれる生物の存在は、水とよばれる要素の制約下でのみ可能であり、水中に存在するだけでなく、水中で生成する。」動物とは、動物が自己を形成するときに自分を包んでいるエレメントのかかわりを欠かしがたい。この関係は、「ゲーテの場合、生物は自己と無関係に先立って存在する環境に順応せねばならぬという風に解すべきではない<sup>26)</sup>。」のである。原型の変化として形態が捉えられる場合、環境と個体とのつながりは、決して外面的、機械的、二次的関係ではない。「適応とは、ここでは決して目標ではなく、すべての生けるものがその世界へ『適合する』という事実を意味する<sup>27)</sup>。」

ゲーテは、一見そうみえる有機体の合目的性に対しても次のように反論する。あらゆる動物は、生理学的に完全であり、「いかなる部分も、内からみると、無益ではない。」のである、と。動物は、「環境によって環境へと形成されたもの」であり、「それ自身のために存在し、それ自身によって現にある小世界」である。

この個体と環境との相関関係による原型と変態の解明から、『色彩論のために』における眼と光との対応関係、相互依存性が考察される。リップスによると、ゲーテは魚を水の「決定的な住人」(entscheidenden Bewohner)と呼ぶ。魚は「水によって水へと」形成されているからである。しかしこれは、「あとから」水が魚に改造しながら働くことを意味するだけではない。リップスは次のように考える。「魚は、むしろ水のために組織されており、その限りその中で己れを維持し、己れを可能にする<sup>28)</sup>。」

「水は、魚がそれで生きるあるもの、魚の現存在の基底に要素として共に編入されているものである。ゲーテは、魚はその単なる環境としての水に適応するだけではないと、考える。……ある動物の要素は、ただ単にその動物の偶然的な環境のような外面的な境位でありつづけはしない。それは、『活動において考えられた現存在』のそこからであり、そこへである<sup>29)</sup>。」

動物の「性格」は、「それが、事物に己れを関係づけ、己れに事物を関係づける<sup>30)</sup>」仕方にある。動物はその要素に完全に支配されている。形成においては、この要素とともに動物は存在する。だから例えば、この要素を再び獲得することが、適応の目的となり得る。リップスは、計り

がたい根拠をもつ動物の体制に対して、天才と呼ばれる精神諸力の複合でのみ、その根拠に迫り得ると、語る。シュタイナー編集のゲーテ自然科学論文集を研究しながら思索した跡がみえる。

注目すべき点は、リップスが、ゲーテにおいては形態が分析と原因追求の対象として捉えられるよりもむしろ「形成」(Bildung)として捉えられていることを明確にしたばかりか、個体と環境との相関関係の理論を発展させ、それで思惟の働きを解明したゲーテを照明していることである。水は、魚の「自然規定」(Naturbestimmung)である。魚が水によって水へとつくられているように、厳密に眼は「その存在を光に負う」のである。リップスは、眼と光との相関関係の法則で人間の「見ること」を理解しているゲーテを主題化する。そのさい彼の手がかりにするのは、ゲーテの次の言葉である。

「眼は、その存在を光に負う。無関心な動物的補助器官から、光は自己の同類となるべき器官を呼び起こす。こうして眼は光にふれて、光のために形成され、これによって内なる光が外なる光を迎え入れるのである<sup>31)</sup>。」

ここで「無関心な動物的補助器官」と表現されるのは、下等動物の「眼」(Grubenaugen)とみてもよからう。「無関心な」とは、まだ未分化で未決定であり、眼の中で「目標として捉えられるもの」を「含んで」いない限りにおいて、言われる。動物はそれで十分自活する。しかし、動物の眼が方向づけのための手段でしかないのに比べ、人間の「見ること」は固有の目標をもつ。我々は、「見ることへ」向かおうとする。人間の見ることは、思惟におけると同じく、「達成された」(vollzogen)ものである。眼は、本来の意味で、「高まること」(Aufstufung)「歩み」(achement)である。

リップスは、光が自己と同類になるべき器官を眼によびおこすとは何をいうのか、また眼が太陽のようなものであるとは何を意味するのかと、問いかける。彼は、次のように解釈する。

「光とは、光として眼に、事物への展望を自由に与えるということの意味するが、それはこの眼との関係で現実的であるだけである……。光は、視力の発動としてのみエネルギーの光となる。それに対応して、眼は光へのその開放性において太陽のようなものとなる。即ち、眼は光とともにあってのみ眼である。光なしに見ること、つまり本来の意味でエネルギーとしての眼でありうることは不可能であるから、眼は太陽のようなものである。光を眼の中の生けるものが頼りにする限りで、光は光として初めて存在を許される。ゲーテの形態学の意味での『決定的な形成』としての眼によって、『純粋な諸関係』は造られ、この諸関係の根拠の上に色彩は生まれる。即ち、色彩は、『眼という感覚に関する合法則的自然』である<sup>32)</sup>。」

このような色彩論の認識原理を契機に、リップスは「見ること」の認識論的考察へ移行する。それは、ゲーテの形態学的自然観の様式を究明することにつながっている。

## 〔2〕認識の形態学的考察

リップスは、次のように「見ること」を理解する。

「見ることにおいては、事物はただ単に個別性においてだけ近づきうるものになるのではない。単に事物のもとで何ものかが経験されるのではない。むしろ色彩を通して眼の感覚にことごとく特別に啓示しようとするある世界の枠組みにおいて、全体として事物は可視的となる<sup>33)</sup>。」

「見ることは、事物の解釈である<sup>34)</sup>。」

「事物は、決定的な形成としての眼によってつくられる純粋な諸関係、例えば展望の枠組みで解釈される<sup>35)</sup>。」

ゲーテにとって、色彩は物理学的に説明されえない。「なぜなら、事物は、眼において自然に対

して特殊な仕方で開示されている生けるものの領域へと関係づけられている限りでのみ色彩を有するからである。事物に対するこの関係が、主観と客観のあいだの関連性へとゆがめられる場合にだけ、色彩は『客観的』として対象に割当てられるべきか、それとも『主観的』として認識の主体にもどされるべきかという問いが生じ得る<sup>36)</sup>。」

リップスは、主観・客観問題の彼岸に存在する眼と事物との生ける関係に注目し、そこに濃縮される直観では、ある理論の例証としての「事件」ではなく、「移ろいゆくものに永遠なるものがつかま」れるべき「模範」が効力をもっていると考えている。

では、ゲーテの自然観は、いかなる様式であろうか。リップスは、近代自然科学の実験的研究方法と対比しながらその型を捉えようとする。ゲーテは、人工的観測装置に不信感を持っていた。「顕微鏡や望遠鏡は本来人間の純粋な感覚を混乱させる。」これは、内的判断能力が外的感官と均衡を欠くという事態を生ぜしめるからである。「眼の生来の使命が誤認されるため、すべてがここでは混乱に陥る<sup>37)</sup>。」のである。ゲーテは『箴言と省察』で次のように記していた。

「人間それ自身は、その健全な感覚を用いる限り、存在し得る最大で最も厳密な物理学的装置であるが、近代物理学の最大の不幸は実験をいわば人間から分離してしまい、単に人工的器械が示すものに自然というものを認識し、いやそれどころか、自然がなし得ることをそうすることで制限し、証明しようとするものである<sup>38)</sup>。」

リップスは、このように人工的装置を嫌うところにゲーテという人間の「精神性」(Geistigkeit)が示されていると、述べている<sup>39)</sup>。ゲーテは、積極的事実の明示の中に小規模ながら確かな基盤を見つける理論家の我意や小心さにまことに神経質であった。その種の理論家は、論争しつつある立場を貫徹しようとする。そしてこの立場は、匿名であり、いつでもどこでも代替可能だし、学ぶこともできるものである。だが、それで何が得られたのかと、リップスは問いつづける。そこで得られるのは、その本質的な「関係づけ」(Bezüge)という名のために切り詰められた世界と関連する専門知にすぎない。リップスは次のように書く。

「物理学者は、『客観的』であるという理由で、彼の世界が『本来の』世界であると、妄想してはいけない。それは、短縮された世界である。『客観的』であることも、現実性の優位を決して意味してはいない<sup>40)</sup>。」

しかし、リップスは、必ずしも一方的にゲーテの自然観の正当性を弁明しているのではない。近代自然科学の「自然」にもゲーテの「自然」にも、それ固有の学問性が存在する。物理学者は、彼の諸前提が有効とするものだけを発見し得る。つまり彼は、人為的観測装置の「要素」と相關的な自然を発見するだけのことである。物理学的自然は、物理学的装置の「要素」である。リップスは次のように指摘する。

「物理学者は諸現象を分析する。彼は、自然を諸条件に従えるが、その際この諸条件とは、彼が技術的に意のままにできるものである。平面が自然に押しつけられ、自然はそれに翻訳されねばならない。ここで自然は、本来的に把捉されるのではなく、つかみかかられるにすぎない。我々は、積極的事象で自然の操作を獲得しようとする。ここで専門性として求められる、そのようなものとしての科学への熱望によって、本来の意味の自然は、視野から去る。実験の諸条件は、固有の手段から企画された一つの体系的連関の証明が問題である限りは、本質上人為的である。この体系的連関は、基本的試みで設置される。その結果自然はゆがめられる。即ち、自然が根源的に出会う場所でそのままにしてはおかれない。物理的自然は、いわば物理学的装置の『要素』であるということである。つまり、装置の命令によって、自然がその枠内で同化しつつ解明されるという状態が造られる限りでのことである。この装置が要求するところのものだけが、物理学



的観察にとって現にあるにすぎない。物理学者は経験を創るのである<sup>41)</sup>。」

リップスは、物理学者の対象としての自然を技術的観測装置との相関関係、相互依存性において理解しようとしている。眼と光との対応関係の理論が、認識問題の形態学的考察を可能にしている。ここにリップスの自然科学の形態学が見事に生かされているといってよい。

では、ゲーテの自然観は、どのような特色をもつのか。人為的観測装置ではなく、眼が要求するもの、眼と対応関係にあるもの、それがゲーテにとって現に存在している自然である。ゲーテを没頭させたのは、自然というよりもむしろ、自然に対する「地上の最も意味深長な対象、人間」の関係である<sup>42)</sup>。ゲーテに重要なのは、自然があるものを自由意志で随意に彼にもたらすところの「含蓄ある点」を見つけることである。

リップスによると、ゲーテは色彩の生成を「言葉と仮説を通して悟性ではなく、現象を通して直観に啓示されうる」根源現象と考えていた。この根源現象のもとに最終的に安住することは、諦念である。この人間性の限界は、単純に受けとられるべき所与の事象の意味での人間的認識の限界ではない。「むしろそこには人間の『生まれついた使命』におけるのと同じことが表現されている<sup>43)</sup>。」のである。

ゲーテの自然は、形態をとったわかりやすいもの、類推や比喻で表現し得るものである、という特徴をもつ。その自然観察では、つねに「主観的全体」があらわれている。勿論このいい方は、控え目な相対化でも限定でもない。眼あるいは直観に固有な使命の遂行を意味している。

## む す び

リップスは、科学を人間の要件とし、生活世界に還元して、そこから照明しようと企てる。「それ（自然科学）は、一定の状況と具体的主体に結びついている。自然科学を研究することは、人間の実存の自由に選びとられた立場である。科学は、世界への特殊な関わりに荷なわれている<sup>44)</sup>。」

科学は、また時代精神の表現である。そこには、人間存在の実存的「立場」(Einstellung)が表わされている。科学を動かす背景に一定の生活気分、パトスが存在する。あらゆる科学的研究の背後に、一定の精神の型があり、いかなる科学の形態、容貌も、それに決定的に規定されている。諸科学はつねに一定の人相を有している。

このように科学の根拠を探って、そこに志向連関を捉えようとする視点、この人間学的還元現象学的方法を見出すことは、容易であろう。しかしそれに加えて、このような還元方法と並行して、志向性というよりも、精神の型を見出そうとする形態学的・観相学的方法が存在していることを、ここで強調しておいてよいであろう。

現代自然科学の特性もゲーテの自然観の特性も、その学問性と結びついた精神の型と様式から了解されるのである。リップスは、個体と環境、眼と光、認識器官と対象などの相関関係を、ゲーテの形態学から色彩論へと辿りながら解明し、機械論と目的論、ダーヴィニズムとロマン主義の自然哲学などと対比させて、ゲーテの研究方法的特質を考究している。そればかりか、彼は、ゲーテの形態学的方法を生かしながら、ゲーテの自然観を含む自然科学の特性を様式変遷において理解することをめざしている。そこにおいては、ゲーテの形態学は、諸科学に潜在する立場、志向性を精神の型として見究めるひとつの解釈学的方法として逆に適用されている。彼の前には自然科学の精神史という課題が出現している。しかもこの精神史研究の方法は、認識現象の発生および形成の法則を究め得るところの、厳密な科学性を有する自然科学の形態学として成立すべきものであったと考えられるのである。

(28. August 1983)

## 註

- 1) フリードリヒ・キュンメル, 高橋義人訳「ゲーテ自然科学の受容」『モルフォロギア』第4号, 1982  
所収, 61頁以下参照。
- 2) キュンメル, 同論文。62頁。
- 3) ボルノー, 芦津丈夫訳「ハンス・リップスのゲーテ自然科学考」。『モルフォロギア』第4号, 1982  
所収, 53—54頁。
- 4) Hans Lipps, Die Wirklichkeit des Menschen. Vittorio Klostermann. Frankfurt am Main. 1954.  
S.128 以下 Lipps, Werke in 5 Bänden. Vittorio Klostermann. Frankfurt am Main を用い, Lipps,  
Werke, V., S.128 というように略記する。
- 5) Lipps, Werke V., S.128
- 6) Lipps, Werke V., S.130
- 7) Lipps, Werke V., S.131
- 8) Lipps, Werke V., S.137
- 9) Lipps, Werke V., S.137
- 10) ボルノー, 芦津丈夫訳, 前掲論文, 55頁参照のこと。
- 11) Lipps, Werke V., S.137
- 12) J. W. Goethe, Versuch, die Metamorphose der Pflanzen zu erklären. G. W. H. A., 13, 77f.
- 13) Lipps, Werke V., S.136
- 14) Lipps, Werke V., S.136
- 15) Lipps, Werke V., S.138
- 16) Lipps, Werke V., S.14f.
- 17) Lipps, Werke V., S.15
- 18) Lipps, Werke V., S.15
- 19) Lipps, Werke V., S.15
- 20) J. W. Goethe, Principes de Philosophie Zoologique. G. W. H. A., 13, 230
- 21) Lipps, Werke V., S.16
- 22) Lipps, Werke V., S.16
- 23) Lipps, Werke V., S.16f.
- 24) Lipps, Werke V., S.18
- 25) Lipps, Werke V., S.18
- 26) ボルノー, 芦津丈夫訳, 前掲論文, 56頁。
- 27) Lipps, Werke V., S.19
- 28) Lipps, Werke V., S.109
- 29) Lipps, Werke V., S.110
- 30) Lipps, Werke V., S.110
- 31) J. W. Goethe, Zur Farbenlehre. G. W. H. A., 13, 323
- 32) Lipps, Werke V., S.111
- 33) Lipps, Werke V., S.112
- 34) Lipps, Werke V., S.112
- 35) Lipps, Werke V., S.112
- 36) Lipps, Werke V., S.121
- 37) Lipps, Werke V., S.123
- 38) Maximen und Reflexionen. G. W. H. A., 12, 430
- 39) Lipps, Werke V., S.123

- 40) Lipps, Werke V., S. 124
- 41) Lipps, Werke V., S. 122
- 42) Lipps, Werke V., S. 124
- 43) Lipps, Werke V., S. 120
- 44) Lipps, Werke V., S. 9